

筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目：貧困の子ども達を取り巻く環境の記述と介入

——子ども達の語る「暇」と活動の変化・拡がり——

人間総合科学研究科 心理学専攻

氏名 広瀬拓海

論文要旨

本論では、現在の日本におけるアクチュアルな課題である子どもの貧困問題に注目して、貧困によって日本の子ども達を取り巻く環境にどのような変化が生じているのかを理解し、またそこで生じている変化に対応していくための新しい支援の方法論を提案するための研究を行った。特に、ここでは近年の日本における子どもの貧困問題を 1990 年代以降の新自由主義に向けた動きと、それにともなう貧困層の誕生を背景にしたものとしてとらえた。そして、そのような背景を踏まえながら、東京都足立区において放課後や休日に子ども達が過ごすための場所や、食事、遊びなどを無償で提供する「コミュニティづくり活動」において、社会物質性研究の立場からのフィールド調査を実施した。

以上の説明を第 1 部の理論的検討（第 1 章、第 2 章、第 3 章）において行っただけで、第 2 部の貧困の子ども達の社会物質的アレンジメントの記述に進んだ。ここでは、本論の第 1 の目的である「現代の日本において、貧困の子ども達を取り巻くアレンジメントの変化と、そこから顕現する効果（すなわち、学習）を記述すること」が目指された。

まず、研究 1 と研究 2 では、この第 1 の目的に沿ってアレンジメント記述を行う準備としての研究を行った（第 4 章）。研究 1 では、コミュニティづくり活動への参与観察を実施し、貧困の子ども達のアレンジメントから顕現する 3 つの特徴（「暇と語ること」、「部活動からの離脱」、「無料の資源による活動の創造」）を抽出した。これにより、以降の研究においてより詳しいアレンジメントの記述を行っていくための指針を得た。また、研究 2 では公立中学校において質問紙調査を実施し、研究 1 の 3 つの特徴をアレンジメント記述の指針として用いる前に、その特徴が見られる子ども達の位置づけを明確にすることを目指した。ここでは、貧困の子ども達のすべてに研究 1 の特徴が見られるわけではないこと、またコミュニティづくり活動にむすびついていない貧困の子ども達も存在していること、コミュニティづくり活動にむすびついていない貧困の子ども達は主に家の中の資源を用いて学校外の時間を過ごしていることの 3 点が示唆された。

次に、研究 3 と研究 4 では以上の知見を踏まえたうえで、具体的なアレンジメントの記述に進んだ（第 5 章）。研究 3 では、研究 1 の特徴が顕著に見られる子ども達に注目して、彼らを取り巻くアレンジメントを具体的に記述した。また、研究 4 ではコミュニティビルダーへのインタビュー調査から得られたデータをもとに、貧困の子ども達を取り巻く「学校」、「家庭」、「コミュニティづくり活動」のアレンジメントについての記述をさらに深め

た。以上の 2 つの研究に加えて、ここでは新自由主義を「権力のテクノロジー」としてとらえる議論を整理して、その観点を踏まえて、研究 3 および研究 4 で記述したアレンジメントの背景にある新自由主義の影響について考察する作業にも取り組んだ。

この一連の研究からは、現代の日本において子ども達が貧困であるということは、新自由主義の影響を受けた人々（例えば、教師や、貧困の子ども達の保護者）との関係の中で「暇」であることを感じつつも、その時間を過ごすために身近な空間の中を利用可能な資源を求めてさまよい、その中で時間を過ごすための活動を見つけ出す状況や、あるいは新しい活動をつくり出すようになる状況を指していることが示された。この状況は、確かにリスクと言えるものであるが、その一方で子ども達が自分たちの参加する活動を「変化」させ、さらにコミュニティビルダーの大人との出会いの中から新しい支援を生み出す（活動の「拡がり」）という希望が一部に存在することも指摘できる。そのため、本論において次に取り組んでいくべきことは、ここで見られた希望をさらに大きなものにしていくこと、つまり貧困の子ども達の「活動の変化・拡がり」としての学習をさらに支援する方法を検討することであることが議論された。

以上の検討を踏まえて、研究 5 では本論の第 2 部と第 3 部をつなぐための研究を行った（第 6 章）。第 3 部で検討する本論の第 2 の目的は、「貧困の子ども達を取り巻くアレンジメントをよりよいものにしていくための支援の方法論を検討すること」であった。しかし、新しい「支援の方法論」についての検討をはじめる前に、まずは「コミュニティづくり活動」のような既に存在している学校外での貧困の子ども達に対する支援が、貧困の子ども達の「活動の変化・拡がり」としての学習にどのような貢献をし得るのか、またどのような課題を抱えているのかを確認しておくことが必要だと考えられた。そこで、研究 5 では足立区において（貧困の子ども達を対象とするか否かを問わず）子ども達の支援に取り組む非営利団体を広く対象とした質問紙調査を実施した。この調査からは、足立区においては X や Y だけではなく地域の中に「貧困の子ども支援団体」が一定数あること、またそこでは特に子ども食堂や、居場所づくりのような地域の大人たちによる気軽に参加しやすい取り組みが行われている一方で、「専門性を持つ大人」が主催する取り組みが少ないという特徴があることが示された。

次に、第 3 部の貧困の子ども達を取り巻くアレンジメントへの介入研究に進んだ。ここでは、本論の第 2 の目的についての詳細な検討を行うことになっていたが、研究 5 の結果を踏まえると、貧困の子ども達に対して「専門性を持つ大人」とのつながりを提供するこ

とが、彼らの「活動の変化・拡がり」としての学習を支えるために重要なことであると考えられた。そのため、より具体的な第 3 部の目的として、貧困の子ども達のアレンジメントに「専門性を持つ大人」をつなぐことに焦点を当てた新しい支援の方法論について検討していくことを設定した（第 7 章）。

特に、ここでは「コミュニティづくり活動」のような地域の大人たちによる貧困の子ども達への支援に「専門性を持つ大人」をつなぐための介入の仕組み（プラットフォーム）についての検討を行った。この仕組み（プラットフォーム）のプロトタイプとして「タレントショーづくり」を考案し、それをコミュニティづくり活動 Y における介入研究として実際に動かした。これにより、貧困の子ども達のアレンジメントの現状をさらによりよいものにしていく支援の可能性と、そこで示した新しい支援をさまざまな現場で用いることができる仕組み（プラットフォーム）として展開していくための観点を示すことを目指した。

研究 6 と研究 7 では、「タレントショーづくり」を通じた介入によって、参加者の子ども達のアレンジメントに生じた変化をデータにもとづいて分析した（第 8 章）。特に、研究 6 では主に「企画ミーティング」の様子を記録したデータから介入によってつながった「人・モノ・制度」を、研究 7 では参加者の子ども達へのインタビュー調査から得られたデータをもとに介入によって形成されたアレンジメントのもとで顕現した効果を、それぞれ詳細に見ていった。

以上の 2 つの研究からは、「専門性を持つ大人」を貧困の子ども達のアレンジメントにつなぐことに関して、(1)「専門性を持つ大人」を貧困の子ども達のアレンジメントに適切につなげることができたならば、それを彼らが「活動の変化・拡がり」としての学習の資源として利用できること、また (2) 貧困の子ども達への支援において組織する活動のあり方（例えば、「タレントショーづくり」）が、「専門性を持つ大人」がどのように子ども達のアレンジメントに位置づくかに大きく関係すること、そして (3)「専門性を持つ大人」を含む子ども達が普段出会わない人々をアレンジメントにつなげることには、学校のアレンジメントにおける息苦しさといった、既存のアレンジメントにおいて顕現している問題を解消する可能性があることの 3 点が示された。

介入によるアレンジメントの変化を検討した上で、研究 8 ではさらに「タレントショーづくり」のアレンジメントを第三者の観点から評価してもらい、今回の介入を実施した調査フィールドのアレンジメントの特徴を分析した（第 9 章）。ここでは、本論の介入によっ

て顕現した効果のうち特に調査フィールドの特徴とむすびついていた効果（および、調査フィールドが目立った特徴）が、「介入を行った活動（コミュニティづくり活動 Y）」、「介入を行った地域（足立区）」、「参加した子ども達」、「実施されたタレントショーづくりのあり方」の 4 つの「人・モノ・制度」に見られることを整理した。プロトタイプとして実施した「タレントショーづくり」をさまざまな貧困の子ども支援の現場において参照可能な仕組み（プラットフォーム）として展開していくためには、以上の分析から浮かび上がった観点を踏まえて、別の調査フィールド、つまり異なる特徴をもったアレンジメントにおける介入研究を実施していくことで知見を積み上げていくことが必要であることが議論された。

以上の 8 つの研究を踏まえて、最後に本論の知見を整理した上で、本論の意義、課題、今後の展望がまとめられた（第 10 章）。